

教育と産業

産業教育研究連盟

第七巻 第二号

誌上シンポジウム 技術学習の評価

技能(技術)評価の方法と問題点… 林 勇
農業的分野の評価と問題点…………… 根岸 正明
学習の評価…………… 後藤 豊治

33年度総会から

一般経過報告

研究討議・技術学習はどうあるべきか

アメリカ便り…………… 鈴木 寿雄

海外資料・中国における家事の集団化

合併号

2・3

巻頭言

どすん、とわかる話

近所の三年坊主である。成績ははなはだよろしくない。いつの頃からか、時どきわが家の同じく三年のアプレ・ムスメのところへきて宿題などを片づけているようである。先日、タバコをふかしながら様子を見ていると書き取りの宿題でもめているらしい。

「『妹のごちそうを食べてしまいました。』って書くんですよ。」

「だってさ、ほんには、『妹のごちそうも食べてしまいました。』って書いてあるじゃないか。」

「だけど先生がいったのは、ええと……」
アプレムスメは考える。

「あのね、ほんでは、『兄さんのごちそうを食べてしまいました。』の次だから、『妹のごちそうも』なのよ。ここでは、はじめてだから……。」

坊主の目がぐるぐるっとまわったり、いきなり「さんせいっ！」とどなって、「妹のごちそうを……。」と書きはじめた。

ふしぎなわかり方である。けれども、ああ、あの子はきつと、どすんとわかったんだなと思った。子どもは、いや大人も、ほんとうにわかるというのは、大げさにいえば驚きなのであり、発見なのであり、感動でさえあるのだと思う。だからそのときは、さんせいっ！とさけび、しめたつと手をうち、あるいはしずかに涙ぐみさえするだろう。

一見氷のような原理や法則が、あるいはただめんどろくさい技術の手順が、子どもの心にどすんとわかること、それが実は、学校でやる科学・材料学習の意味であり、ねうちであるはずだ。精選された経験（内容と学習方式と）が、右のような発見や感動を、どこでいくつ子どもに与えているか、それが、いわゆる学習課程の分析と構成の視点でもあるだろう。問われるべきものは、学習者自しんの認識の構造と、その発展である。

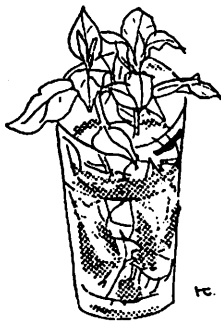
教育課程改訂をめぐる論議が、そのところをす通りしてしまえば、もはや教育課程の論議ではなくなってくる。むしろ、往時の感動主義や、児童学的指向においていうのではない。技術革新時代に対応する社会的課題を強調すればするほど、そのような歴史的必然の中核をなす認識とその方式が、一人ひとり

の人間にどすんと主体化されることの重要さは、一そうの重さで要請されるからである。もともと人間は、極めて複雑な生活活動の中から、その歴史的社会的に（そしてその階級の利益に）適合する教育をくみ立ててきた。

こんにちの新しい教育課題もまた、同じような歴史的必然に応ずる。こんにちの人間のしごとである。ただ、文化財の爆発的な増大と、そして社会の複雑なメカニズムが、ほんらいの認識をそれさせるおそれは、こんにちもつとも大きい。あれもこれもと汗だくで教え、教わった結果が、体質的には何ものをも生まなかった。では大変である。

どすんとわかる技術学習を生み出したい。そのためには、あくまでも子どもから目をはなさない研究をほり進めていきたいと思う。

（村田忠三）



◇◇技術学習における評価◇◇

技能(技術)評価の方法と問題点

林 勇

一、はしがき

「評価は教育を推進させる原動力である。」一定の意図と、企画のもとに行われる学校教育においては、社会のねらっている理想的人間像をめあてに、生徒の、すべての面の発達について、その目標に向つて、前進的变化を考へて推進している。評価は、この過程において、生徒のあらゆる面におこってくる変化と発達について、教育上の価値を問題とするのである。

われわれがこれから検討しようとする問題は、教育評価の、主として職業・家庭科学習の中における技術評価についてである。さてその問題の検討にはいる前に、わたくしが、現場の実践を通して、わたくしなりにつかんでいる評価の意義や、目的、並びに問題点について、一応ふれることを許していただきたい。

二、評価についての考え方と問題点

評価は、戦後の新教育の方向にそつて、カリキュラムや、特にガイダンスの問題が重要視されるようになって、従来のテストとか、

試験といった教育測定の範囲では、その問題の解決や、推進が困難となってきたことから、より包括的な測定概念を導き入れ、広義な人格の発達や、教育計画の主要目標の面にまで、測定のねらいを広めた新しい意味の用語である。教科の学力や、特定の技能のみならず、態度・興味・思想、作業態度、さらに個人的・社会的・順応性の測定をも含めた、いわゆる評価は、科学的な教育測定を包括した意味をもって、誕生したことは自明のことである。(参考文献(1)、二二九頁)

新教育では、古い戦前の教育とことなつて、新しく、教育目標が設定され、教育の内容や、方法も変つてきた。そこに当然、測定の方法やその考え方も、改められなければならないことはいうまでもない。

従来はとかく、生徒が教科の学習により、どれだけの知識や、技能を習得したか、という範囲の測定だったものが、さらにどのよう学習を進めているかといった態度や、また、生徒の性格をどのようにつくっているかといったように、測定の観点を、被教育者において、広く人格の発達までも問題とするようになったことが、新し

い教育評価の考え方である。

評価は、その目的・機能をみれば明らかのように、一つには、学習指導が、指導目標に照してどんな価値があったか、個人、および集団にどのような効果をおよぼしたか、即ち、教師が個々の生徒の発達の程度や、その過程を明確にするために行われるものがある。しかし、こうした生徒の学習指導の結果資料として、「どれだけ」を得るためばかりではない。(参考文献②、一一頁)

教師が指導上の自己反省という立場から、自らおこなっている教育や、その目標、計画が妥当であるかどうか、とりあげた教材や、実施した学習指導法などが、いかなる効果をあげたかどうか、はたしてその学習の方法でよかったのかどうかなどを知るためにも評価は重要である。

さらに学校教育が、地域社会の協力を得るための資料を求めるために、評価の必要を認めるともいわれている。(参考文献③、一三頁)

即ちそれは、「どんな価値があるか」ということまで問題とする必要があるのである。

このようにみてくると、「評価は、教育を推進させる原動力である」ということの意味が、一層はつきりしてくるであろう。

このことは、学者はもちろん、研究的な教育実践家からも、強く主張されてきたことである。しかしながら、現場においては、この評価についての実践は、残念ながら極めて低調である。

特に職業・家庭科の学習において現在のところ、少なくとも筆者の知る限りでは、こうしたことの実践研究は非常に少ない。またみるべきものがないのが実情である。

前者一の、生産個々の発達程度や、どの程度指導目標に到達したかどうかを評価するという分野においては、それでも知的な面を中心として一応研究され、実践がなされている。けれども後者の、学校教育の管理という立場から、学校教育全体の効果制定や、教師の教育効果の反省のための評価にいたっては、さらに数少なく、みるべきものがない。

現場の教師にとっては、生徒の学習効果の評価ということはもちろん重要なことであり、一番の関心事ではあろう。しかし、学習成果を規定する要因として、学習活動のほかに、教育課程とか、学習指導法、教材、教師そのものの、学校環境等が、問題となる。また生徒は、どんな態度をもっているのか、どんな事に興味をもっているか、またもつようになったのか、などがあげられる。これは直接学習の成果ではないけれども、評価の対象として、計画に入れねばならない事である。こうした事がら相関連して、生徒の全人的な人間を形成するわけであるから、ぜひ、総合的な評価の対象として、考えなければならぬことである。

しかるに、こうしたことが、評価の対象として検討されることはごくまれであって、たまたま研究し、評価を実施したとしても、その結果の解釈や、教育計画の改善への適用といった事になると、その実践はなおまれのようである。

評価の中で、それでも研究し実践していると思われる、学習成果の評価にしても問題はあまた残されている。知識教育主義がわざわざいって、知識の暗記の量の測定で終っている場合が多いのである。

技術的、実践的教科の職業、家庭科でさえ技術に関する知識がどの程度に、学習者に受けとめられたかをテストする方法が、その大部

分をしめているといった現状である。評価は、学習の指導目標の設定、目標の分析、そして目標に即した評価、という、基本的手順によつて行われる。ところが職業・家庭科においては、めまぐるしい教科の改訂で、教育計画をたてるのに追いつてられ、たいせつな指導目標が混とんとし、あいまいで、とても評価技術の研究まで手が出ないのが実情だ、という人もある。

その上、教育の現場には、上級学校進学 of 狭き門があつて、激烈な入学試験にパスできなければ、その将来に決定的な不利をもたらす、という社会通念がわざわざいし、学校教育もこの影響によつて、実践的技術教科でさえ、暗記の性格をおびてきている。

入試は、処理の簡単な一斉試験で、整理に容易なペーパー・ステト法をとるので、入試に備える態勢として、実習のない技術教科(?)といった学習の偏向が強くなつてきた。

まして、今後進路別の二本立コースが実施されるとなると、進学組には、実質的に技術科はどの程度に編み入れられ、技術指導がなされるのかまことに心配である。

三年生の後期になつて、短時間の間に教室で知識の注入が行われ、たまたま技術実習をやるとしても、記憶の印象や、確実さを深めるだけの意味に実習をとり入れるといった、学校が出てくるのではないかと、ねんするものである。

こうした観点からしても、今後、評価や、測定法についての研究はきわめて重要である。技術的な面は、経験することによつてのみ習得し得るものがあり、人間形成には、欠くことのできないものである。実習中に予測しない興味がわき、問題解決の能力がつき、成功のよろこびを味わうことができる。技術は実際に手をくだしては

じめて、練習ができ、身につくものである。

入試は、もちろんのこと、技術教科の評価は、知識の深さをみるとか、既往の実習の経験の有無を問うばかりでなく、注意力や、正確度を問うとか、実習方法の正確さ、道具の使用法の巧みさ、また技術的な関心の度合を知るといった研究がなされることが緊要なことであると考える。

全くの技術についての評価で、例えば、機械の分解・組立はどの程度できるか、電気器具の保守修理はどきるか、定規をどの程度正確に使用できるか、といった技術の評価は、一斉テストでは不可能になつてくる。作品をみるだけでなく、実習を観察記録し、またチェックリストで評点をつけるといった方法をとらねば、いまのところ解決できない。これさえも一学級六〇人近い生徒を扱っている現場の実情では、時間的、労働力的に困難がともない、あまり実施されずにいる。

以上評価の目的や、問題点について、まとまりもなく記述してきたが、技術教育の重要性からみて、将来、いろいろの点から、評価の実際についての、研究を進めて行くことの必要を痛感している。

三、職業科の評価目標と方法

本題に立ちもつて、職業家科の教科学習における評価は、どのようにしどんな用具や、技術を用いたらよいか、さらにそのなかの基礎技術の評価はどのように実施しているかについてふれ、大方の御批判を得たいと考える。

学校教育の中核は、教科学習である。

もちろん、教科指導を考へるときにも、啓発すべき人格性の教育

(第一表) 一部未完

野	技術に関する知識・理解	基礎技術 (技能)					業的分野	分野	評価の具体的目標	主なる評価用具・技術
		業的分野								
		電気	機械	木工	金工	製図				
<ul style="list-style-type: none"> 産業とその特色 職業とその特色 各産業、職業の動向 各産業、職業における技術の重要性 	<ul style="list-style-type: none"> 各項の技術に関する知識 	<ul style="list-style-type: none"> 作業計画立案の技術 分解、組立 保守、管理 整備、調整 	<ul style="list-style-type: none"> 作業計画立案の技術 点検、修理 操作運転 	<ul style="list-style-type: none"> 設計、作業計画の技術 機械使用 組立接合 	<ul style="list-style-type: none"> 工具、用具の使用 材料切断・加工 	<ul style="list-style-type: none"> 設計表現の技術 器具用具の使用 青写真作製 	<ul style="list-style-type: none"> 経営計画立案の技術 耕起、土壤管理 施肥、肥料管理 播種、管理の技術 中耕、肥培管理 収納管理 	内容	<ul style="list-style-type: none"> 客観テスト 標準テスト 論文体テスト 自己評価 	
		<ul style="list-style-type: none"> 器具用具の使用技術 器具の組立分解 部品の加工、交換、修理 器械の試験、調整操作 	<ul style="list-style-type: none"> 工具、用具の使用 点検、修理 操作運転 	<ul style="list-style-type: none"> 設計、作業計画の技術 機械使用 組立接合 	<ul style="list-style-type: none"> 工具、用具の使用 材料切断・加工 	<ul style="list-style-type: none"> 設計表現の技術 器具用具の使用 青写真作製 	<ul style="list-style-type: none"> 経営計画立案の技術 耕起、土壤管理 施肥、肥料管理 播種、管理の技術 中耕、肥培管理 収納管理 	内容		

とその評価は重要である。このことは前にもふれておいたが、わたくしは、職業科のそうして面についての実践研究結果をもちあわせていないので除外するが、しかし、これは職業科独自の計画だけでは包括的な目標が達成できるものではない。学校全体にわたる指導や、ガイダンス計画と関連して、はじめて、職・家における人格性の指導計画や、目標が立ち強みに啓培できるのである。前述の意見とむじゅんするようで恐縮だが、そうした理由から、以下で、取りあつかう職業科の評価は、学習指導要領や、指導要領に示された指導目標にしたがって分析し評価目標や、用具、技術について検討してゆくことにする。

元来、教科学習は、

一、学習指導の目標の決定

一、学習指導の目標の決定

二、目標にそくした教材や、学習経験の選定

三、設定された教材や、学習活動の効果的な構成

四、学習効果の判定

以上の四つの段階で学習指導が流され

態 度	問題解決的思 考・能力	社会的・経済 的・知識・理 解
<ul style="list-style-type: none"> 科学的、合理的(用具、材料の正しい使用、能率) 創意工夫(美的表現、実用、探究心) 継続的、規則正しい観察(努力、注意力、計画的、探究) 計画的自主的な作業(仕事の段どり、生産意欲能率) 正確な作業尊重(寸法正しく用具の正しい使用) 積極的な作業(勤労尊重、技術の重要性認識、能率、探究心) いいねいな用具、機器の取扱い(大切に、手入れ保存、責任、注意力) 材料をそまつにしない(材料の節約、合理的な利用、注意力) 能率的作業(積極的な作業、計画的、規則正しい、科学的合理的) 身じたく(能率、注意力、努力、積極的な作業) 注意力 探究心 責任 協力 	<p>全 体</p> <ul style="list-style-type: none"> 問題の発見 知識、原理の適用 問題意識(学習そのものの) 自主的、計画的な学習 	<p>全 分</p> <ul style="list-style-type: none"> 技術の発達と現状 技術の改善進歩 生産性の向上と国民の生活 経営の合理化 相互関係 労働状況と機械化 能率と安全 職業と保健 労働法規
<p>観察記録 評定尺度 チェックリスト 質問紙 面接 ノート検査 論文体テスト 感想文 自己評価 ガスフーテスト</p>	<p>行動の観察記録 評定尺度チェックリスト 自己評価 客観的問題場面テスト</p>	<p>客観テスト 標準テスト 論文体テスト 自己評価</p>

る。評価は一応四番の段階が、その任務領域といえる。(参考文献(4)、二二九頁)

しかし、それも学習指導における学習活動の一部ともいべきものであつて、評価は、その本来的性格から、常に指導目標と連関して、行われるべきものである。即ち、一、二、三の項目がもとになり、その目標がどのように生徒個々の行動の上に実現されたか、どの程度に近づいたか、具体的指導はどうしたらよいかといった価値的観点から判定を行い、さらに、はじめの三つに反映し、目標の修正となり、指導内容や、指導方法の改変となつて現われて、はじめて評価のすべての機能が発揮されたといえるのである。

したがつて、何を評価するかという評価の目標は、何を指導するかという指導目標と密接に関連するものであつて、学習の目標が即ち評価目標となる。そこで直接の学習指導においても、評価にあつても、教育目標を明確にすることは何よりも重要なことになってくる。何をめざしているのかの認識さえなくて、与えられた教育課程と、ありふれた教科書

や、教具で、しかも古い学習指導法で教育し、なんらの批判や、反省もないとするならば、教育の推進は望み得べくもないであろう。

さて、職業科では、指導目標に照してその評価目標として、(1)基礎技能(技術)(2)技術に関する知識、理解、(3)社会的、経済的知識(4)問題解決的思考能力、(5)態度、の五つをあげたいと考える。これは大まかな分け方であつて、各目標は、各単元の実際の指導や、評価のために、さらに具体的に分析し、把握しておくことが必要となる。目標を生徒の行動的な記述に分析すること、すなわち、能力、理解、態度などに現われる多様な生徒の行動の変化が、確実に把握できるように、具体的に行動的な記述項目を設定することである。

評価はさらにその目標に妥当する、また、信頼性、客観性のもてる評価用具(技術)と、その使用法を検討せねばならない。(参考文献(4)、二九一頁)

こうした評価目標の分析や有効な用具についての細部案は、紹介する余裕はないが四〜五ページの評価計画表(第一表)をみて概要を理解していただきたい。

四、基礎技能(技術)の評価

職業科では、基礎的技術の習得が教科の中心学習になる。したがつて、基礎技術は、職業科の評価中、最も重要な位置をしめ、その価値の比重は、大体、七〇〜八〇%程度といわれている(参考文献(5)、四六八頁)

職業科で、技能の評価といつても、各分野によつて、評価のねらいはある程度の違いがあり、プロジェクトによつて、種々の評価内容が考えられる。さらに、問題解決的な学習によつたかどうか、ま

た個別学習、グループ学習か等の、指導法のちがひによつても、評価の態度や、方法が変わってくる。従つて、その全部にわたり述べることはとてもできないので、ここでは、工業的分野における技能の評価法について、その実施してきた一部の例をあげるに止めたい。

(I) 工業的分野の基礎技能(技術)の評価方法

工業的分野の技能評価にして、プロジェクトの内容によつて、評価項目は一樣にきめられない。木工・金工のように、加工過程を経て一定の作品が完成される単元と、同じく作品が完成されるにしても、製図や、電気・機械のように加工過程が少なく、表現や、組立操作の作業が中心となるものとのちがひがあると考ええる。

(II) 木材加工の学習評価基準と評価方法

技能の評価には、いろいろの困難と問題点があるが、まず、木工(本立)を例にとり評価計画を紹介してみよう。

作業実習は、個々で作品を作る場合はもちろん、グループ協同製作にしても、技能の評価目標は、一応個々の生徒におかねばならない。

個別学習といつても、実習は必ず学級、グループ集団の協力、相互援助がなくては、成り立たない。(グループ学習それ自体の評価は、別に独自の評価基準を設定しなくてはならない。)そこでグループ別、協同製作の場合は、各メンバーの役割について、じゅうぶんに注意をはらう必要がある。一人が、ノコギリによる切断を全部やってしまったのでは、他のメンバーの技能評価はしてみようがない。

次に木材加工技能の分析を行い、評価の具体的目標をあげてみるば、

(一) 計画のたて方を中心にみる、技能評価基準

1、工作図を正確にかく技能、

- (1) 形・デザインは創作的か。
- (2) 製図の基本によっているか。
- (3) 寸法は正確か。
- (4) 図面のまとまりはどうか。

2、計画的、能率的な工程表を作る技能

- (1) 作業区分、内容工程、予定時間、材料工具の準備計画は適切か。

(2) 自己の能力に合っているか。

3、科学的で正確な技料見積りの技能

- (1) 材料についてよくしらべたか。
- (2) 価格や規格の調査をしたか。
- (3) みやすい表が作られたか。

4、用具の点検、手入れの技能

(用具、機械の点検、手入れの技能は、特別の学習計画を立てて指導し、そこで評価することがよい。実習中は、きれいなカンナや、まがったノコギリを手入れをしないで無意識に使用していないか、用具は所定の場所にかえしているかなどをチェックして評価する)

(二) 機械、用具の使用を中心にみる技能の評価基準

1、科学的、目的的に木どりをする技能

- (1) 材料の性質を考えているか。
- (2) 工作図の寸法どうり正確か。
- (3) むだがないか。

2、ノコギリを正しく使って切断する技能(機械使用の場合は別)

- (1) たて、よこびきを区別しているか。
 - (2) 正しいもち方と力の入れ方および角度は
 - (3) 姿勢のとり方と注意力
- 3、材料の性質を考えてかなけずりをする技能(機械使用の場合は別)
- (1) 刃の出し方

- (2) カンナの持ち方と力の入れ方

- (3) 材料の性質とけずる方向

- (4) 材料と位置と姿勢

- (5) 板けずりの完成の上でその製品から次のことを測定する

(木表・木裏・木編・木口)

A たいらに、きれいにけずれたか。

B 寸法通り正確か、

C 角度は直角か、また規定の角度かの注意力

4、きりの穴をあける技能

- (1) きりは用途別に区別して使用しているか。

- (2) きりのもさ方

- (3) 穴の角度と姿勢・位置

5、組立て、接合の技能

- (1) 組立ての順序は合理的か

- (2) 緊結材料を正しく使っているか

- (3) 釘のうち方は正確さ、注意力

(組立て接合の技能は更に完成作品をみて全体的な立場で評価する)

(第二表)

材料切断, 加工の技能				作業計画の技能											評価目標	評価内容	氏名																
けずり		のこぎ		木どり		機械点検		用具の入れ		材料		工程						工作図															
材料の位置と姿勢	材料とけずる方向	持ち方と力の入れ方	カンナ刃の出し具合	姿勢	正しい持ち方角度、力	たて、よこぎぎの区別	材料のむだ	寸法の正確	材料の性質	使用における注意力	機械の手入れ	用具の手入れ	機械の点検	用具の点検	材料表	評価・規格調査	材料研究調査	自己の能力に適合	材料・工具	予定時間	内容・工程	作業区分	図面のまとまり	寸法の正確	製図の基本	形、デザイン	1回	2回	評点	1回	2回	評点	1回

よくできている
 よくやっている
 普通
 あまりよくない
 あまりやっていない
 × 三段階にわけチェックする。

6きれいに塗装する技能

- (1) やすりかけとめどめ
- (2) 材料と色あい
- (3) はけ(タンボ)の使い方

(三) 製品の完成後でき 工合を中心にする技能の評価基準

- 1、全体的評価の前に製品をみて次の技能を再評価する。
- (1) 木どりの技能
- (2) カンナけずりの技能
- (3) きり穴のあけ方、および釘打ち接合の技能
- (4) 組立ての技能
- (5) 塗装の技能

以上について製品を評定しながら前二項の作業過程において評価した結果とみ合わせて評価を再確認する。
 2、更に製品について

- (1) 外観、できばえ、うつくしき、仕上げのいいいさ
- (2) 使用価値
- (3) 仕事の速さ
- (4) 寸法の正確さと手ぎわのよさ、注意力

以上の結果から総合的に、全部の評定をもとに、次
 四 技能の全体的、総合的評価

総合	の立場から 全立	機械、用具の使用技能														
		製作品から					装			組立		きり		かな		
		使用価値	仕事の速さ	寸法の正確さ	製品の事来工合	仕事の速さ	塗	装	釘の打ち方	緊結材料の使用	順序は合理的か	穴の角度と姿勢、位置	きり	かな	かな	
		1	2	3	4	1	2	3	1	2	1	2	3	1	2	3

の三つの評価項目毎に測定値を出す。

- 1、製品の出来工合
- 2、仕事の速さ
- 3、仕事の正確さと注意力

以上三つの総計点をもとに、技能の評価を実施している。たとえば、3の、仕事の正確さを評定する場合、前のすべての評価基準の測定記録をみて、そこに記入された、「正確さ」を参考に、総合的に、評点を出す方法をとるのである。(第二表参照)

(評点のらんは広くして観察記録がかけられるようにしてもよい)

この評定は5段階でやっている。

五、おわりに

技能の評価は、学習過程における計画的な観察をおこなうことによってはじめて、その目的が達せられる。できるだけ同一の場面と同一事項について、一定の時間に、計画的に観察、記録をすることまた、実習過程について、個々に、報告をさせるなどが大切である。

しかし、こうした実習中における評価は、真に容易ではない。六〇人近い生徒の材料や、用具の世話、危険防止の注意、進度のちがう個々の指導、遅進児の世話、次から次へとくる生徒の相談に応じなければならぬ。

そうした中で、めだつ生徒をチェックするだけでも、やっとなかもしれない。ましてや、観察記録をしたり、報告をきくなどは、及びもつかないこととしていきおい製品だけをみて、一回の評価ですませる結果にならない。これでは真の技能の評価は出来ない。

こうした困難の中で、それでも努力すればやれるのはチェックリストである。そうしたことからわたくしは、こまかく分析したチェックリストを作つて評価をしている。

紙面の都合で、以上技能評価の一例を述べるに終つたが、お互いに、現場でもっと評価の研究をすすめて、更に技術教育の推進をはかるうではないか。(新潟県立教育研究所員)

○参考文献

- (1) 小見山栄一外 教育評価と測定 教育心理学講座五(金子書房)
- (2) 四方実一 現代教育評価法(日本文化科学社)
- (3) 小見山栄一外 教育評価、教育大学講座32(金子書房)

農業的分野の評価とその問題点

根 岸 正 明

一、職業家庭科における農業的分野の位置

現行指導要領においては、第一群として、農業的分野を位置づけ、その教育内容を、栽培、飼育、農産加工に分類して取りあげている。農業的分野の大きな特長は、生命体の愛育であり、動植物の生長を通し、気候、風土の自然的条件と結びついた技術学習が行はれるところにある。第二群ならびにその他の群でおこなわれる学習は、無生物を対象とした、操作、構成、製作、計算等であって、自然環境とか、生命体のもつ伸長や運動を加えたものの中に存在する技術とは大きな開きがでている。

いま、自動耕うん機を例にとってみると、水冷、空冷の別はあるが、原動機としての機能の上に、作業機械を組み合わせたものといえる。

この耕うん機の、内燃機関の構造と作用、故障の点検、分解組立、調整、操作などを中心として、第二群の学習指導が集められる。

しかし、第一群の場にあつては、農業作業機として、前述の学習

- (4) 橋本重治 教育評価 教育大学講座32(前出)
- (5) 清原道寿外 職業科指導事典(国土社)
- (6) 後藤豊治外 産業技術教育講座3(生活科学調査会)
- (7) 沢田慶輔外 教育評価事典(国土社)

の基盤に立って、運転・操作が行われなければならない。機械の性能、土質や土壌の性質、田畑の別、排水の良否、栽培作物の種類、耕うんの深淺、各種の作物生長促進の要素を中心に総合して、農業の仕事は進められねばならない。作物栽培のための技術は、作物生長を助長し、促進する実技であり、知識理解でなければならぬ。さらに、飼育の問題にしても、長い間の観察と、一定方式の技術それに附帯する知識のもとに学習の成果が期待される。動物の生長が気候、環境、人為的管理の合理性などに支配されるもので、第二群などのように一定条件の下に一定の技術を加えて、一定の物を作成することができるのは、おのつと異つてゐる。このような学習の特異性が技術の特殊性をつくり、学習効果の測定にまで影響をおよぼしてゐる。

二、農業的分野の評価の諸問題

中学校における農業的分野の学習は、各種の条件によつて一樣に行われていない。また学習結果の成績も地方とか都市によつても異

るし、教師の技術指導力にも左右されるであろう。

(一) 農業的分野の学習効果に影響をもつ条件

(1) 施設・設備 農業実習地の有無や広狭と、それに伴う、管理に必要な用具の質と量の問題

(2) 自然条件 農業は気候の支配・土質・土性の影響・病虫害発生の状態などの問題をもつ。

(3) 地域性 技能には地域差がある。農村の生徒は生まれながらに、農業的環境に育ち、しぜんにある程度の仕事は身につけている。

(4) 集団作業 学校における栽培、飼育には集団作業の場が多い。

(5) 教師の技術的能力 教師は一般に科学的知識は持つ。しかし実際栽培に当つた経験は非常に浅いものが多い。

(6) その他 地方農業の特長と発達の種類等その他。以上の事がらを通じて、この分野の評価の手がかりや、問題点をさぐってみよう。

学習効果をあげる諸条件がむづかしいほど、特長のあるほど、評価それ自体に困難さと特長があらわれてくる。前述の諸項目以外にも評価上の隘路があることも合せて考慮の中に入れておかなければならない。

(二) 農業的分野評価上の問題点について

(1) 施設・設備と評価 農業的分野の学習効果の大小は施設・設備の有無に帰結するといつてよいと思う。職業・家庭科は、基礎的技術を実践を通して、理解し、身につけるべき教科である。

必要にして、十分の耕地をもち、農機具ならびに、それに必要な

農業管理室、堆肥舎などを保有する所にあつては、教育の成果も十分に期待されよう。もちろん生徒も喜んで作業にあたり、観察もよ

りよく行えるであろう。これにくらべて、農場もなく、農機具もない所で、農業技術学習を行わなければならない学校での問題は大きい。

実際全国には施設・設備の皆無に近い学校数も非常に多い。職業・家庭科の一分野として学習の過程や結果を測定する場合にどのような基準から考えねばならないか。評価は普遍性と論理性と基準

性の上に立つて行わなくてはならないとするならば、施設・設備をどうしても一定基準の下に揃えさせねばならない。この点産業教育

振興法が施行されても、施設皆無の学校は、まだまだ解消していない。現在施設のない学校で行っている実状は、高等学校入学試験に

見る通り、技術的知識や社会的経済的知識理解のみの評価に止まってしまう。校庭の一隅、花壇の片隅、植木鉢で行う農業的技術の学

習を、真の効果ある技術学習とは思えない。むしろ実験観察に終始する理科的学習にしか過ぎないであろう。職業、家庭科の目標に掲

げている基礎的技術や、科学的、能率的に実践する態度、勤労を重んずる態度などを養うわけにもゆかない。結局それらは、評価の対

象外にはみだして行く。例えば、トマトを栽培するのに、耕地で行う農業も、植木鉢で一、二本栽培する技術とは、定植にしても、培

土整地・施肥・除草・灌水・病虫害防除等の諸作業を通じて異ってくる。したがって学習の形態から言っても、生徒の活動方法から言

つても、興味からも異つた結果がでてくる。

(2) 地域性と技能 農村と都市という「性別や環境などにより特長をもつものである」点から考慮される。農業に対する農村生徒の理解度と都市の生徒の理解度とは異り、技能においても非常に大

きな差がでてくる。例えば「畝を使用する技術はどうか」「堆肥に対する理解は十分であるかどうか」と言う評価項目について、結果は都市と農村の生徒が比較にならないことは当然である。

(3) 実技評価の基準 農業学習の評価について、実技はどのような基準にもとづいて行われたらよいか。具体的には「苗代の作り方はどのように注意したらよいか、その技能を身につけているか」「トマトの定植がよくできるか」等について、「よくできる」「大体よい」「普通」「よくできない」「できない」と判定する場合、「普通」の技能とはどのようなものだろうか。(このことは前二項の施設、設備や地域性の問題にも大きく関連している。)基本的には定植の方法が一応方式にかなっていても、これに付帯する条件が整備されないとトマトは活着しないか、あるいは活着後の生育が甚だしく害される。「トマトの定植ができるか」の技術は、単に植えられると言うことでなく、植えたものが完全に生育することを前提としたものでなければならぬ。こう考えてくると、実技の評価の「普通」は他教科における「普通」に比較してその設定に困難さが多い。

さらに、態度の問題になると、授業中、とくに指導者の目が行きとどいている時の生徒の行動と、十分に目の行きとどかない時の行動は、正しい評価をしてゆくための時に、非常に大きな問題となってくる。

農業的分野の評価基準を定めるならば、地域差その他の諸条件を考慮して、評価の基準となる「普通」の技能をどの程度にするかということに留意しなければならない。

(4) 農業担当教師について 農業担当の教師の数は、職業、家

庭科担当教師の内に相当多くの数を占めている。この農業担当の教師自身の農業実技の程度に問題があり、学校の農作物は一般農家のものより成績は悪いし、非科学的、非能率的な部分が相当多く見られるのも事実である。学校を卒業し、すぐに生徒と共に農場に出ている数多くの教師は、科学的には正しいが実技の力が十分であろうとは言えない。温床踏込みの理論はわかる。しかし生徒を指導して実習した結果、熱が出なかつたり、出過ぎたりする。こうして実技の評価は、教師の力の問題にも大きく関係してくる。

(5) 評価の態度 職業・家庭科が、仕事を経験して、基礎的技術を学習し、産業や職業生活についての知識・理解を得、諸能力を養うものである以上・仕事の反省に重点が置かれねばならない。したがって、一つの評価項目について、技能・知識理解態度・習慣を評価する必要があるが、そのさい特にかつての実業科や作業科のような方向に傾いて行かないようにしなければならない。勤労を重んずる態度が、過重で、無意味な訓練のみを中心とするものに重点がおかれてはならない。

(8) 評価総合の問題 職業・家庭科は第一群から六群までであるが、これ等各群の評価が一つの形で現わされることに問題がないだろうか。農業的・工業的、商業的・家庭的な各技能には、おのおの特長がある。生徒の興味も異っている。動植物が好きだから、電気・機械が上手に使えるとは言えない。そろばんの計算の技能と、被服製作の技能が同一なものでもない。このような場合、指導要領や通知票がどのようにつくられ、どのように、利用されているだろうか。各群を一人で扱い得る教師はとにかく農・工・商と二人または三人で指導する場合は、評価結果を適当に勘案して職業・家庭科と

してまとめているのではないかと思う。けれども、職業・家庭科が「職業指導における情報ならびに啓蒙的経験に役だつたものである」とするならば、各群それぞれにおける評価結果が記録され、教師の指導の資料とし、生徒の父兄の参考に提示し連絡されるべきであろう。この事は、選択教科の農業コース（設定されている所では）にも関連をもつものである。

(7) 他教科との関連性 農業の学習は、理科や社会科保健・体育にも関連をもつてくる。これらの評価について十分に理解し、特に知識・理解の面における配慮が行はなければならない。たとえば理科における植物生理は栽培学汎論に通じ、社会科の産業分布や交通、気候が農業の生産、消費、職業生活への理解に通ずる。このようなときに、一方の知識、理解と他の教科の評価とが大きな開きをもつて出てくるはずがない。さらに農業実習において、くわやかまを使って生徒が負傷するような事故についても、保健的な理解や能力が考慮されてよいだろう。またくわの使い方などから曲った姿勢を作らない正しい指導も評価の対象として考えねばならない。

三、残された今後の問題点

農業的分野のいろいろの問題点をならべて来たが、基礎的技術を分析し、これが実技の指導を評価し、その結果を十分に反省するとともに、この問題点を追及しさらに施設設備の充実、教師の現職教育、評価内容やその技術について検討し、適正なる評価基準によって、地区や都市、都道府県などを対象に確立し、普遍的な結果によって、農業的分野の正しい学習の発展をはからなくてはならない。実際問題として施設・設備が一朝にして全国的に引き上げられる

ものではないし、教師が現職教育がすぐに徹底するものでもない。ただこのような事柄に不断の努力をそそぐとともに、評価にあたって十分なる配慮によって、調整するように心掛けねばならないと思ふ。
(群馬県板倉中学校)

つぎは高等学校に！

.....教育課程改訂のうごき.....

小、中学校の教育内容は三十六、七年度から切りかえられることになったが、こんどは高校の教育課程が大幅に改められることになり、文部省は四月はじめに教育課程審議会に諮問することになっている。

二月二十七日付「朝日」によれば、文部省が、このうち、特に改めたいと考えているのは、道徳教育、数学、職業・家庭の各教科であるという。

数学は、小、中学校段階でも一年ぐらい学力を引上げることができると、大学側からもっと高校数学の程度を充実せよという要望が出されているという事情から改訂がせまられている。文部省が実施した学力テストの成績も百点満点で全日制高校の全国平均が三十二点弱という悪さであったことも原因しているとみられる。

その半面、高校卒業ですぐに就職するものは全体の五十六%、四十六万人もいる。この生徒たちも大学進学組と同じような教育を受けているため、文部省では「経済界ではすぐ使えないという苦情がある。このため、普通課程の高校生でも就職希望者には職業教育を強化する考え」のあることを、同紙は指摘している。(編集部)

学習評価について

後 藤 豊 治

学習評価ということが、どんな意味をもっているかについては、林さんの論考のなかでくわしくふれられているので、再びとり上げる必要はあるまい。むしろ、ここでは、学習評価の重要さがわかっておりながら、それが実際に行われないうる条件や、困難なその条件のなかでもせまっていける方途を検討することに中心をおいてみよう。

◇

技術学習の効果判定を困難にしている最大の条件は、学習人員の過多ということである。技術学習の指導するのに適切な人員は五人程度だといわれる。これは、実習展開過程の所要所で、生徒ひとりひとりの行動が、正しく運ばれているかどうかを見とどける限界をしめすものと考えてよい。すると、学習をすすめるのに好適の人員というのは、学習評価を適確にするための限界人員ともいえる。それなのに、五〇名をこえる人員を、助手もなしに、同時に指導している現状は、指導効果の点からみても、その判定という点からみてもふりであることは明らかである。

しかし、こういっただけでは現実の問題の解決にはならない。学習人員を少なくするための担当教師定員増・実習助手のかくとく、学級定員減などの実現にむかって、たえず努力していく一方、現在の状況での最善の方法を見出すくふうも必要だろう。

まず第一点は、その学習の中心目標は何であるかを確認する必要がある。

自転車の実習を例にとってみよう。自転車の分解・組立・調整の点検・排除がうまくできるようになることが、ねらいではあるまい。自転車という好適な(?)素材のあつかいをおして、機械の主要な要素や機構を理解させ、金属材料について研究させ、機械を分解、調整するおもな用具のつかい方を習得させることに中心があるのだとおもう。なかでも、機械要素と機構が中心になるのではないだろうか。

すると、自転車の実習による学習をおして、どうしてもはつきりつかまなければならないことは、機械要素と機構が実践的に理解されたかどうかである。他のねらいは、これに比すればやや副次的な意味をもつと解してよい。だから、極端にいかにすれば、どうしても全面にわたる評価が困難ならば、評価をこの一点にしほつてもよい。ところが、あれやこれやの点をまんべんなく見とけるのに苦心しながら、この一点を案外見とどけていないことも多いように見うける。

こうみてくると、どうしても、この学習では、すくなくともこの点とこの点をねらって学習させるといふ、中心目標をきめること。

アメリカの技術教育見てある記

鈴木 寿 雄

昨年の八月日本をたつてアメリカの教育視察に行った鈴木さんから、連盟の委員にあてられた手紙を要約して掲載します。「宇宙時代」にはいった現段階において、世界の主要諸国が、教育の変革に真剣にとりこんでいるときアメリカ教育の生々しい動向をしめすものといえます。

(編集部)

ピア大学も、その規模においては、この大学の半分くらいです。地方の州立大学も、このくらいに完備していれば、日本のように学閥などというものも、自然になくなるだろうと実感をもちました。

大学のあるコバーリスという町は、日本の地図にはないくらい小さな町で、人口二万のうち半分は大学関係者ですから、完全な大学町で、市議会の法律よりも、大学の規定が優先するという協力ぶりです。たとえば学校構内の周囲一マイル内では、酒類を売らないとか、三つある映画館のすべてが週日は午後七時以降でないとか、始まらないとか、ともかく町全体が学生の勉学に協力している感じがします。

したがって私もこちらにきて二カ月になりましたが、まだ映画を一本もみていないありさまです。

この大学で「アメリカ教育の問題」「科学教育の問題」「工業教育法」「理科教育法」「工業教育文献研究」の五つの特別講義を選

択しています。いずれもかなり示唆にとんだ内容が多く、改めて勉強させられています。この大学は三学期制ですから、一応それぞれについて完結したものを聞くことができず。これらの講義が月・水・金五時間ずつあり、課外のリクリエーションにゴルフとダンスを一時間くらいずつ隔日にやっています。最近では講義を聞くことは余り苦にならなくなりましたが、話の方は仲々上達しません。

この大学に日本人学生(大学院)が七名いますが、三カ年はいないと自由に話すことは困難だといっていますから、一年か半年でペラペラ話せるようになったというのはウソのようです。しかし、少しはなれたせいか、ともかく相手にわかってもらえるくらいにはなつたようです。

火・木・土は十月下旬からオレゴン州の小中・高校の見学にあて、いままでに小学校三中学校二、高校五、成人学級一、職業学校一をみてまわり、州の教育委員会を一回訪問しました。この州は十二年義務制をとっております。見学の際いつも頭を悩すことは、学校組織が同じ州の中でも町によって異なる点です。たとえば、コバーリスでは六・三・三制、隣町のアルバニーでは六・二・四制、ポ

十月から十二月まで三カ月間をオレゴン州立大学で、「科学教育と技術教育の関連」を主題として、大学院コースの特別講義を聴講しています。大学はアメリカ西海岸のコバーリスという小さな町にあり、理・工・農・薬・林・家政・商・教育の八学部と大学院で組織されています。学生数は八、五〇〇、敷地は五〇〇万坪、その中に無数の建物が並び、サイクロトロンの実験室や、K O A C ・ K O A C - T V という教育放送局まで備えた大学です。日本では有名なニューヨークのコロン

トランドでは八・四制、首都のサレムでは六・六制というふうに、初等学校、中等学校という概念は、日本ほど画一的ではありません。同じように科目名も学校によってちがいます。州として「最低基準」はかなり大まかにきめてあります。しかし教科書は州で選択した数点のものを無条件に使用しています。これは州の予算で教科書を買って配給することからきていると考えられます。

小学校教育では3アールズに力を入れ、社会科などは日本で考えるほど盛んでないと思いましたが。理科は一日おき、工作は全くやっていません。音楽と体育はこちらの生活と結びついているためか、かなり充実した授業がみられます。理科・工作が弱いのは、女教師という理由にかなり根拠があると思います。しかしクラスの人員が少ないので個別指導は徹底しています。

中学校はとくにインダストリアル・アーツを中心に見学しましたが、いずれのばあいでも相当な実習室(木工・金工・製図室)をもち、必修として課しています。一年三六週を一二週ずつ、木工・金工・製図にわたって時間を割くつくって、それぞれ日本とくらべて授業が生々としています。このインダストリ

アル・アーツにくらべると理科はあまりすすんでいません。とくに人工衛星旋風以降、この州の中等教育もかなり変化をきたし、週当り授業時数が三〇〜三五時から四〇週に延長され、音楽会とかフットボールなどの課外活動がかなり制限されはじめたとの話をききました。こうした動きの中で、インダストリアル・アーツでもあたりなく「エレクトロニクス」Electronicsという科目が新設され、八学年から毎週五時間ずつ大学に進学できる優れた生徒に選択させています。

高等学校でもインダストリアル・アーツをおろそかにしていません。なお高校の理科教育で新しい方向と感じたのは、一つは「Physical Science」という科目(物理と化学の統合教科)が新設されていること、もう一つはM・I・Tプランによる物理の研究(五〇〇万ドルの研究費を使って、高校の物理を実験的に効果的に教える方法の研究、その要点は実験に必要な設備を工夫自作して、それによって測定し結果をまとめるという能動的な学習に重点があり、かなりの技術を理科に導入し、実験室は工作室に近くなってくる)が三冊目にはいつていることです。なお、職業教育については、この州は問題になりませんの

で省略します。

暮の二十日にコーバリスを出て、カリフォルニアの州の首都サクラメントに旅行し、六三制の本物の実状を調べてきました。この州は十二年義務制で、すべての高校は総合制高校で、単独の職業高校はなく、コースも細分化されず、目標も職業前教育といった程度です。したがって高校におけるインダストリアル・アーツはきわめて重視されています。そして職業教育は卒業後の諸機関で行われています。これでこそ総合制が生きているし、六三制が強固な基盤をもつのだと再認識しました。ロサンゼルスでは、インダストリアル・アーツは最も完備し、日本でよく紹介されている一九四八年のコース・オブ・スタディーはその後二回も改訂され、いままだ改訂中で、そのはげしい変遷に驚きました。ここでは、エレクトロニクスは常識で、日本とは段ちがいでです。

行程二五〇〇マイルに及ぶ正月休みの旅をおえて、いま北端のシャトルにいます。これから五日ぐらいつつの予定で学校と工場の見学の旅です。

技術教育前進のために

三三年度総会から

年次総会での一般報告(要旨)

昨年度総会前の方針立案時、および総会の承認をえたあとでの主構想はつぎのようであったと思う。

- 1、中学校だけでなく、小学校、高等学校における技術教育まで、さらに社会教育・企業内教育としての技術教育にまで検討の幅をひろげ、技術教育の系統・連けいを明らかにすること。(そのばあい中心はあくまで中学校にすること)
- 2、そのためには研究体制を拡大強化しなければならぬ。それが委員の拡大であり、拡大された委員による数部門の研究部会設置であった。
- 3、財政上の困難を克服すること。このため

には、雑誌発行に要する経費を会費だけでまかなうようにこぎつけること。これは会員数の拡大によってしか達成できない。もちろん、技術教育(ことに普通教育にお

ける)推進の基本的構想を主体的に発展させていく努力を結集するという基本目標の上にならぬが、右の三点も同時に達成ゆれなければならぬ、ということである。右のようなねらいは、達成されたであろうか。

まず、「普通教育における技術教育実践態勢の検討」という基本目標のもとに設定された具体的目標は、ただひろい分野に問題領域をおしひろげたという感じで、あまりに広汎にすぎなかったか。これは年次目標というより、ここ何年間かを要して、達成すべき方向を設定したにすぎなかったとみるべきであろう。年次目標はもっと中核的な問題をとらえこれを究明することにおかなければならなかったろう。事実、本年をふりかえってみて、研究活動はほとんど具体的目標の1の(1)にかかれていたように思う。

その研究活動の内実は、浅川での夏の大会に発表された域にとどまっている。その後は種々の事情によって停滞している。その事情のおもなものは、技術、家庭科の内容が発表されたが、これとこれまでの検討方向とをどうかみ合わせていくかについてとまどいが生じたことであつたと思う。その他の事情とともに検討を要する問題である。

ただ、ながい間整理されないうままになつていた、〃総合機械工業における基礎学力の研究〃が、主として東野、水越両氏の努力によつて整理され、その一部がここに発表されるに至つたことはいふに可い。技能者養成についての研究はここに報告できるまで進展しなかつたことはざんねんである。

研究体制について 研究部会が設けられ所属するメンバーが増大したことで研究体制がととのつたとする誤りはなかつたか。しかもその体制は、いわゆる中央での体制整備にすぎなかつた。中央にブレインがあつて、部局をつくり、そこで現場の実践上の要求、問題とのかみ合いなしに、研究室の作業が行われる。それが全国の会員に機関誌を通じて流される、という体制でしかなかつたように思う。この点最も切実な反省を要するところであ

あるう。

私見をのべることを許されるなら、われわれはお互いに、研究の真のふかまりを達成するために、全国にわたるサークルづくりを真剣に検討しなければならぬ段階にきているのではないか。サークルのひろがりこそが教育実践の着実な進展に寄与している、という評価は最近大きくなっていると思う。他教科・他の民間教育諸団体の全国にわたるサークルづくりの努力と歩調を合わせていきたいものと思う。この努力なしには、教育へのほしいい権力統制の網をたち切ることができないのではないだろうか。

これまで東京の部会、いわば東京のサークルと他地方とのサークルの交流がとぼしかったこと、また東京サークルも主として研究的作業にたより、その間実践現場の問題をじかにとらえ、その問題解決の過程での研究が行われなかったこと、機関誌もまた現場からの問題把握と報告を怠った点など反省させられる。年度後半、連盟だよりで報告したように、各地で技術教育に関するサークル研究活動が生れつつあるのはうれしいことである。これらの芽を中心に、相互の交流をすすめる、サークルの拡大を望みたい。第二日後半で、

サークルづくりについてじゅうぶん検討して頂くよう要請したい。

財政面について 当初の努力決意にもかかわらず、この面の改善も効果が上っていない。(資料：略) 会員数の飛躍的増大もむなしかった。しかし、全国の会員諸氏のはたらきかけで同志を糾合するうごきがすすんでいることは、いろいろのデータから推察できる。さきのサークルづくりの課題とにらみ合わせても、次年度に希望のもてる傾向ではないかと思っている。

他団体との連けいに関しても所期の効果は上げえなかった。しかし他からの働きかけ、他への働きかけはやや活潑化してきているので、これまた次年度に期待できる地ならしのはたらきをしたと思う。

以上のような状況のもとに本総会をむかえた。この総会を、研究発表を中心に企画したのは、発表についての検討結果、解決を要する問題としてまとまったものこそ、われわれが次年度目標として、一年間とりくむメドになるものだ、それを求めようという意図からである。なお、研究発表、検討を実際の学習指導の展開を中心としたのは、特定の学習内

容が妥当かはどうかは、それがいかに展開されているかをつきとめないことには正しく評価できない。しかも、これからの研究が実践にたつてすすめられ、実践をたかめる方向にむいていくような研究方法のメドもえられると考えたからである。研究発表を中心に、じゅうぶんな検討を重ねていただいて、連盟の次年度の活動の方向づけをして頂ければ幸いである。
(後藤豊治)

技術教育 第一号(五月号) 予告

□ 論 説 細谷俊夫 伊藤忠彦

□ 実践報告 葉山貞胤 大垣内重男

◇ 本年度の教育計画

◇ 余市プランのできるまで

◇ 実習指導のおさえどころ

草花の栽培 製図

自転車 電気アイロン

海外資料

機械機構学習の展開

学校訪問—春日部中学校—

資料—家庭科教育について—

技術学習にとり組むか

総会討議のあらまし

はじめに

研究討議をふくめた連盟の年次総会は十二月二十七・八の両日、国学院大学でひらかれた。総会の研究討議は内容からみると、実践報告に基づく研究討議と、それをふまえた次年度の活動方針に発展する討議（主として第二日目の午後）との、二つの側面をふくんでいる。ここでは前者すなわち実践報告に基づく研究討議を概括し、問題点を整理するにとどめよう。

提案された研究討議のテーマはつぎのようなものである。

1 電気分野における指導領域と内容の研究——電熱器具を中心として——

（後藤・降旗）

2 総合機械工業における基礎学力の研究——理科・数学との関連——

（東野・水越）

3 職業・家庭科における社会的知識の理解——職業指導との関連——（池上）

4 女子向き内容の問題点

（和田）

5 現場はどのように移行研究を考えているか

（稲垣）

6 大阪市における職業科研究会の動向

（山田）

（なお、このほかに、「ほうれん草の栽培学習」も予定されていたが、提案者の急用ではぶかれた）

これらの提案のひとつひとつは、もとより重要な問題点をふくむが、技術学習のあり方をたしかめながら活動方針をうちだすという総会の最終目標を達成する方向に討議がすすめられた。

提案1について

本誌の、昨年十一月・十二月号にわたって、「テストの製作」についての指導展開例を掲載したが、それは、この提案1の副題が示すように、共通学習としての電気器具が発展し、三年の選折として学習される単元であった。生徒は配線図を買ってきて安易に配線す

る現状なので、この単元では設計指導に重点をおき、ラジオ学習の前段階として単元を設定している。この提案では、つぎのような問題点が指摘された。

●電気分野の学習内容の抽出と選定をどうするか。（提案5と関連）

●技術と技術的知識を、どうとらえるべきか（提案2と関連）

●現行職・家庭科の第六群を独自の領域として設定せずに、それぞれの単元にくみいれて学習させているが、そのもつ限界をどうするか。（提案3と関連）

●この単元の研究は、もともと県の中学校教育研究会のテーマとしてすすめられたものであり、研究方式のあり方とも関係する（提案6と関連）

以上のような諸点はいずれも他の提案にも関連することであり、提案2・3の発表と関連させて討議を深めることになった。

提案2について

この提案は、技術および技術的知識と数学や理科との関連を、機械工業の作業内容に必ずつきまとう「ネジ」を一つの例としてとりあげたものである。ネジの原理、その利用、ネジ切り作業など、作業内容を一つ一つ分析

し、それに照応する理科と数学の基本領域をおさえ、そこから数学と理科のテスト問題を作成するという、根気のいる綿密な研究である。もとよりこの例からすぐに教育内容を抽出できるという性質のものではないが、数学や理科との関連を説明する一つの手がかりとして示唆にとむ提案であり、討議もかなり深められた。

この提案に対しては、提案1とも関連してつぎのような質問や意見があいついでされた。

●数学・理科の学習と技術学習との時期的ズレをどうするか。またその有効な単元のくみ方や指導法はどうか。

●研究調査としては興味があるが、数学でえたものを技術学習でどう生かされているかをペーパーテストでみようとすれば、問題作成に相当の研究が必要ではないか。つまり技術学習では、実際にはすべてが総合された形で問題がでてくるので、単純化された数学問題にしてしまうと意味がなくなる。理科や数学が技術学習ではどう生かされているか、それを具体的な素材のうえにたった場を設定して、問題とすべきである。

●技術学習における系統性が確定されていないところに、数学や理科との関連が複雑にからみあってきて混乱がひどくなる。むしろ技術学習の系統性を確定することの方が先きではなからうか。

●数学や理科で学習した原理や法則が、技術学習ではその通り生かされないことがあるが、それは技術学習の問題があるというよりは、数学や理科の学習のふたしかさに基くものではないだろうか。

これらの諸点については、つぎのような討論となって発展していった。

この研究は当初、指導要領の批判検討を意図していたため、実際の学習指導の研究は残された課題であるし、テスト問題としても不適當なものがある。しかもペーパーテストになると、生徒にとっては文章把握に抵抗があるため、厳密な問題を作ることがいっそう困難になる。また技術学習においては、いつでも基礎理論として数学や理科が先行しなければならぬという考え、つまり数学的、理科的基礎の応用という考え方は危険である。技術面で、数学や理科が結びついていない欠陥をどうするかは考えなければならぬが、その時にも技術との関連で、数学をどう系統づ

けるか、という技術からみた数学への要請も必要になってくる。たとえば、ピタゴラスの定理でも、対称図形にしても、数学の教師は案外に数学が技術の場でどう使われているか知らない。だから数学や理科に限らず、各教科で学習されたことが技術学習の場で総合的に生かされてこないことにもなる。これは各教科の教師の結びつきを教科研究を媒介して深めるといふ学校の仲間づくりの問題にもかかわってくる。

さらに、技術学習における系統性は、他教科のそれに優先して確定されるべきだという意見については、数学でも、小・中・高をみとおした教育内容の再編成の段階にきているし、その他の教科でも現在、系統性を再検討すべき時期にきていることが指摘された。

「技術学習に系統性を」という考えは、ともすれば一方では今回の技術・家庭科にみられるように、技術学の体系を強調する傾向がある。それは、いわば対称の論理の系統性ではあっても、子どもの側からの、つまり認識の主体の側にたった系統性を必ずしも指すものではない。われわれとしては、技術の体系を追求しながらも、子どもの発達段階と学力とからめて系統性を考えなければならぬし

数学、理科、技術学習の再編成という視点でそれらの関連を検討する段階にきていることを確認しておきたい。

この系統性には、当然、提案1や3で提起された社会経済的知識の理解や第六群ないしは職業指導の領域の再検討がからんでくるので、つぎの提案にうつることになった。

提案3について

この提案は、職業指導と技術学習をぎり離すべきでないという発想にもとづいている。おもてむきは奇異に感じられるこの提案は、東京都でも有数の進学率の高い中学校でのなまなましい実践に根ざしている。越境入学者も多く、職・家科の学習が一クラス七〇名にもなり、そのうえ施設設備の殆どない進学校制で固められた学校である。このような条件のなかで提案者は、職業指導といえ、受験指導と職業幹旋がすべてだと考えられているこの分野のあり方に、強い疑問をいいている。

本誌の一月号でも、「学級活動としての進路指導をどう進めたらよいか」（後藤豊治）「差別教育について——新指導要領体制に立ちむかう進路指導——」（菊地良輔）の二編が、その問題点と方向を適確にとらえている

ので同時に参照していただきたい。

しかし技術学習の系統性を深めるうえからも、職業指導の意味を正しておかなくてはならないという点はあらためて確認しておきたい。それは提案者もいうように、職業指導が技術・家庭科から脱落して、社会科へ移されてほっとしたということですまされることからはではない。また環境や条件を考慮しない適職検査や自己分析にどれほどの教育的意義があるかを疑うことももとより当然のすじみちでもあろう。

この提案に対してはとくにつぎの諸点が討議された。

● 技術学習のなかに職業指導を位置づける意味がはつきりしない。

● 生活指導のなかでの職業指導をどう考えるか。

● 社会科とちがう形の職業指導というは具体的にならうか。

● 必修教科が進学体制のなかで歪められており、職・家科の教師だけが、職業指導体制においこまれていいることをどう考えるか。

右のような諸点については、職業指導は生産学習と密接に関連する教科でこそ扱われるべきで、単なる知識学習ではとりあげる色あ

いも変わってくる。また生活指導で扱うべきだとする意見については、進学体制で固められている学校では、生活指導自体の歪みが、本来の職業指導をも歪めている。こうした条件のもとでは、技術の習得よりも、「選職」に重点をおかざるをえないが、クラブ活動的な形態をとって工場見学を頻繁にもつた理由もそこにあったという。このような指導は、徒弟教育を肯定する意図ではむろんないし、むしろ労働法規の学習に重点がおかれ、それも単なる法規の解説におわらせない配慮がとられているという。

ここで討論は、労働法規の学習から進んで技術学習における社会経済的知識の側面が、学習の場どう結ばれるかに発展し、提案1・2・3に共通する問題として、清原委員からは、とくに技術学習についての二つの考え方が指摘された。

第一は、技術学習に自然科学の成果をどう適用するかという問題であり、第二は、技術は、ほんらい社会経済的側面をもっているから、それをどうからめてゆくかという問題である。

この二つは歴史的にはどのような条件のなかで発生し発展してきたものかをあらためて

考ふるべきではなからうか。第一の点は、今日のソビエトでは強調されているが、それにはそれなりの歴史的社会的条件がある。しかしすくなくとも、ソビエトでも、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけては、クループスカヤも指摘しているように、第二の点をも強調していたことは注目されてよい。(クループスカヤ「国民教育と民主主義」岩波文庫)わ

が国の技能者養成では、技術学習に自然科学の適用をとりいれながらも、他方では、社会科学に矛盾するような三菱精神、三井精神をたたきこんでいる。基本的には、この両者が科学や法則にのっとって結合されてこそはじめて正しい認識に導かれるが、しかしそれは単なる知識学習だけでは養われぬ。だから労働法規が社会科で扱われるべきか、技術学習で扱われるべきかという二者択一の形でとらえるのではなく、社会科で扱う意図と技術学習で扱う意図を確認しなければならぬ。

解説学習ならば社会科でも扱うだろうが、技術学習を通して、労働法規を具体的な場で考えさせる方向に発展する分野は必要になるだろう。

提案4について

女子向き内容の問題点は、これまでの家庭

科研究部会でもたえず問題になっていた三点について参会者から示唆を得たいという提案としてしめされた。

第一は、教育内容の選定にあたって、父母の実用的要求にどうこたえるべきか、たとえば単衣長着は、農村では実用的観点から教育内容にとりいれるように要求されるが、被服製作学習としては長期にわたる単純作業になるので省きたい。つまり教育的にみて意味のないものは切りすててしまえばよいのではないだろうかという点である。

第二は、家族関係の学習についてであるがこの学習を物的処理の問題とからめてやるべきだとする主張と、それだけでは不十分であり、家族関係独自の科学的追求をなすべきであり、学習としては当然、分離して教えるべきだとする主張(磯野誠一・磯野富士子「家族制度」岩波新書)とがある。これをどう考えるべきか。

第三は、高校普通課程における技術教育はどうあるべきかという点。

これらの点については、提案者もいのように、家庭科における「技術」の二つの側面(製作技術と経営技術)と「技術」概念の相異や混乱にもからまる問題で、たとえば単衣

長着にしても、それには、それなりの技術はあるが、生産技術に見合うようなものではない。そういう意味では、これまで討論されてきた技術学習とは異質のものだといえる。参会者からも、家庭科が技術教育として成立するものかどうか疑わしいし、実用的要求ということも、時代の進展にもなって急速に変化するだろうから、実用的要求にはむしろ社会科学や自然科学の面から追求する視点が必要にならう。また製図の基本が洋裁製図はどうつながるのかも明らかにされていないが

それでは技術学習として線をとおすことはできない。単衣長着にしても、すべてが手縫いでなく部分的にはミシン縫いも利用できようし教材としても父母を啓蒙することによって漸次はずしてゆくべきだろうというかたちで男性側から意見が開陳された。以上の諸点については会員のみなさんからもぜひ御意見をうかがわせていただきたい。

提案5について

三十七年度から発足する技術・家庭科への移行教育計画を、受け身でうけとめるのではなく、主体的にどう切りひらいてゆくかを問題にしたものである。そのためのしごととして、さしあたっては、つぎの点を解決しよう

としている。

● 現行の職・家科と改訂の技術科に通ずる技術として基本的なものを抽出し、単元を設定すること。

● 技術学習を阻む施設設備と教師の指導能力の問題。

提案6について

● 大阪市の職業科研究会では技術・家庭科を主体的にうけとめるために、まず指導要領にもられた実習例、時間数、指導計画から有効な技術学習のための施設設備の基準を作るしごとにとりかかっている。(一クラス五〇名とする)

● また現職教育を積極的にとりあげて、十人くらいを一グループとして、生徒を使った実地指導も計画中である。

● 地域の実情からみても、三群的分野の指導を切り替えることはむづかしく、とくに簿記は系統的に学習すべき性質のもので、三年の総合実習だけではどうにもならない。従って科学・技術・経済の三つの側面を調整するしごとが課題となってくる。

以上の提案と討議の過程で、技術学習の系統性を検討し、再編成するしごとがうかがひあがってくる。しかも他の教科との関連のもつ

意味や社会経済的知識を理解する分野のもつ意味の再検討をふまえた教科の再編成が強く要請される。

また技術学習における、たとえば自転車の分解、組立が、自転車屋とかわらないような「やり方主義」におちいらないためにも、技術にひそみ、それをささえている原理や法則を適確にとらえさせる指導でなければならぬいし、他教科の教師との質の高いふれあいも必要になるだろう。本年度ののぞましい研究方式や活動方針も、おおよそ以上のような提案と討議の過程から推察していただけるならば幸いである。(村田彦彦)

景気後退下の国民生活

——— 第三回国民生活白書より ———

経済企画庁が昨年十二月に発表した景気後退下の国民生活と題する白書は、国民生活の動向を知る上に、多くの興味ある材料を提供してくれるので要約してみよう。(編集部)

(1) 景気が後退したにもかかわらず、個人の所得はひきつづきかなり増加した。しかし不況や減税の影響によって、階層間の所得格

差が開いてきた。

(2) 貯蓄も増加したが、単なるたくわえから資産として有利に運用しようとする利殖の傾向が強くなってきた。

(3) 消費支出のうちでは家具じゅう器、教養娯楽関係への支出がいちぢるしく増加したが、同時に衣料や副食などにせいたく品を使うという高級化の傾向がでてきた。たとえば、食料全体としての消費水準は二・五%のびたが、主食の消費は前年と変らない。四年つづきの豊作で粉食の普及は停滞している。

・ 衣料では、しだいにデッド・ストック(死蔵)の割合が高くなっている。

・ 住生活では、いぜんとして未充足分が多く、国民生活の中でもっともおくれている。

(4) 耐久消費財などを購入するために月賦販売が急速に普及している。

これをみると、国民生活は万事好調に向かっているようにみえるが、厚生省の「厚生白書」をみると、だいぶ様子がちがってくる。

そして、「生活水準の向上」や「消費ブーム」到来のかけ声が、実は高額所得者や「中間層」化した労働者だけのもので、貧富の階層差がますますひらいてきつつあることがわかるのである。

「これからの課題」

次年度の活動をどうすすめるか

まず機関誌に反映されている、「程度の高さ」が問題にされた。現場の教師のなやんでいる問題の次元はもっと低い。それも実践の現場によこたわっているいろいろな困難な条件からくることであって、手も足も出ないでいる状況である。そんな状況をかえりみず、技術教育のあるべきすがたをうち出すだけでは、現場教師の「かわき」に応ええないのは当然ではないか、との見解である。

機関誌に反映されるものが「高い」かどうかは一応おくとしても、現場の実践的要求・問題にかみ合う研究のすすめかたであったかどうかは反省を要する。中央の研究会は、大学のゼミ形式をとっているが、これではだめだ。もつと現場の態勢整備の問題の中にくいこんでいき、問題解決に力をかし合うことでサークルも自然に育っていくものだ。また、現場のなやみ・うえ・かわきは、どこか高いところに救いを求めるのでなく、同志のサークルの中にもちこんで、お互いに理解し合い

問題解決の方途をもとめる。その解決へのエネルギーが連盟全体としてもり上がり、新しい検討方向をつくり、その検討成果が問題解決のために放下されるというはたらしきの関連をつくり上げていくべきだ。以上のことが、第一の問題点についての見解であり、確認された方向であった。

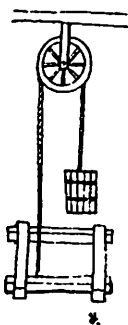
第二の問題は、研究方向のめやすとして、「やり方主義の克服」についてであった。エンジンの学習をすすめるにしても、単なる分解・組立・操作のやりかたをやっているにすぎなくて、エンジンを素材としての技術の学習という域にきていない。要は自然科学のうらづけがなく、技術の奥さいへの適用の知識理解からたちきられ、いたずらにジョブ・シートをふりまわすような学習しか行われていない。いわばHowからwhyへの指導しかたは、もうすこし研究されるべきではないか。しかし、現場の当面の要求は、まずHowだ。Howにだけでも急速にとりつかないこと

には、教えることすらできない状況。このような状況は無視すべきではない。そのような状況からほりおこしていくなかで、理論化・高度化をはかつていく方途を検討せよ。やりかた主義の克服は職・家だけの問題ではなく、すべての教科の問題だ。そこに他教科教師と手をつなく基盤がある。ここにサークルづくりをすすめ、ささえる内容が出てくるわけだ。

こうして、理論化はやはり間断なくすすめるべきだ。官制の研究はおおむね技法研究にすぎなくて、無理論だ。それはこのような民間教育研究団体がやらなければならない。これまでの諸意見の方向を実現しながら、技術の理論と教育の理論をたかめ、その正しいかみ合いをさぐる必要がある。

大要、以上が方針討議の要点であった。

(後藤)



連盟だより

昭和三三年度総会のような事は、別報のとおり、参会者は少数でしたが、真剣な討議に終始し、昭和三四年度の活動方針をうち出しました。

方針として確認されたことは大まかで、前年度のように具体的目標を列挙することはしませんでした。しかし中心の目標は、いぜん「普通教育における、技術教育実践態勢の確立」におきながら、その目標を実現するために、「全国に研究の仲間をこしらえていくこと」と「やりかた主義の克服」に努力を集中することの二点が確認されました。この二つのねらいへの接近しかたについてもいろいろ話し合われたことはもちろんです。

総会では新委員も選出されました。本年度のねらいである「仲間づくり」の活動を推進するため、委員も東京地区だけでなく、全国的に分散配置するほうがよいとの議が出て承認を得、左記のかたが推薦されました。(敬称略・アイウエオ順)

池上正道(東京・四谷二中) 池田種生(教

育評論家) 稲垣恒次(愛知・新川中) 稲田茂

(東京工大附高) ト部太郎(埼玉・用土中)

大垣内重男(北海道・登中) 清原道寿(東京

工大) 草山貞胤(神奈川・泰野南中) 後藤豊

治(国学院大) 塩沢尚人(長野・信州大附属

長野中) 杉田正雄(神奈川・大島中) 世木郁

夫(京都・船田中) 千田カツ子(岩手・常盤

中) 高橋太郎(群馬大) 中村邦男(東京・山

崎中) 西尾幸子(埼玉・教育研究所) 根岸正

明(群馬・板倉西中) 長谷川清(山形・五

中) 林 勇(新潟・教育研究所) 東野 貢

(東京・高田中) 日昔恵美子(兵庫・神戸大

附属中) 淵初恵(大分・東有田中) 本田康夫

(日教組・情宜部) 水越庸夫(千葉・市川一

中) 村田忠三(国学院大) 村田泰彦(東京文

化短大) 矢野敏雄(国学院大) 山岡利厚(長

野・岡谷西部中) 山口富造(東京工大) 山口

福男(埼玉・春日部中) 山田明(大阪・夕陽

丘中) 矢島せい子(子どもを守る会) 和田典

子(東京・戸山高)

科教協代表 数教協代表(白石勲司)

なお一月三十一日の初委員会で構成された各

部局のメンバーはつきのとおりです。

〔常任委員会〕草山貞胤、稲田 茂、和田典

子、東野 貢、編集委員代表(村田泰)

委員長、事務局

〔編集委員会〕村田泰彦、池田種生、清原道

寿、中村邦男、村田忠三、委員長、事務局

〔委員長〕後藤豊治

〔事務局〕矢野敏雄、山口富造

なお、編集委員会が拡大強化された事情に

ついては、別項、「機関誌刊行の変更につい

て」によりご承知下さい。

今後機関誌発行が出版社にまかされると、

全国にわたる組織への連絡が困難になると思

いますが、よりよい方法を見出すよう努力し

ます。会員諸氏からも積極的な連絡をして下

さるようお願いしておきます。

そろそろ、三十四年度の夏の研究集会のこ

とが、常任委員会の話題になっています。本

年は各民間教育研究団体のあいだで、時期の

連絡をとって効果的に開こうという機運が生

れています。たんなるお祭り行事でなく、一

年間の成果をみんなて批判検討するためのこ

の上ない機会ですので、会場や集会のもちか

たについてご意見をおきかせください。

(事務局)

用語解説

天敵とは、普通の生物とくに虫鳥獣によって天然の敵であつて、これらを殺す動物昆虫や鳥獣と、またこれらに寄生する病原菌も含まれる。人間にとつても病原菌や寄生虫は広義の意味では天敵である。一般に動物の存在するところには、直接あるいは間接的に必ず相互に利害關係をもつ天敵がいるために自然界においては、自物生存の自然的つりあいが保たれている。しかし、害虫が大発生したばあい、天敵を繁殖させて害虫を殺す方法がある。これを天敵利用といつてゐる。現在害虫防除法として急激な新農薬の出現により、害虫の防除効果のきわめて大きなものが多くなつたので、この使用に注意しないと、天敵に大害をおよぼすことになる。従つて、これを保護しそれによつて害虫を駆除することは、一面では作物保護と経済的な面から重要な位置を占める。もしこれら天敵が害虫の防除に完全に利用できるならば農薬撤布の必要もなく、農業にとつては有益であるが、その実用化は困難である。職・家科では、作物を害する動物、害虫の防除のしかた、害虫の種類と防除薬剤、病虫害の予防と駆除法等の学習を通じて、天敵の利用が作物栽培上重要な課題であることを理解させることができる。とくに理科でとり扱う単元と関連づけて、栽培学習では直接に天敵と害虫にふれてみるのが有効であらう。

(山口福男)

天 敵

て い あ ん

◇ 研究会のもち方 ◇

○各ブロックごとの研究会に力をいれたい。たとえば、大阪ならば、山田明先生あたりが中心になって、近県の先生が参加して研究会をもつというように。

○学校ごとの横の連絡を密にしたい。たとえば、兵庫県でも、一校だけの研究はするが、全県的な研究集会や近県をも含めた研究集会がない。これをぜひ実現したいものです。

○また、ある地区で研究会が行われるときには、近県の先生方に招待状を出していただいて参加することはどうでしょう。

◇ 機関誌のよこ書き ◇

本誌十一月号の吉田元先生の提案に全く賛成です。

1、工業出身の小生は横書きになれている。

2、表・図案等が入ると必ず横書きがともなうし、漢数字は読みにくく、まちがいがやすい。

3、数学、理科、職業、家庭科の教科書は横書きです。

4、本誌の表紙が横書きで、内容がタテ書きというのは、ちょっとおかしい。

(神戸市魚崎中学校 植田善弘)

て い あ ん

中国における
家事の集団化

中国の社会主義建設事業は年ごとに人びとの生活や思考をかえつつあるが「家事の集団化」は、中国婦人の徹底的な解放をおしすすめる運動として発展している。わが国の教育課程では、僅かに高等学校家庭科のなかに、「大量炊事」(三一六単位)として顔をのぞかせており、「調理全般についての知識・技能を習得するための科目」(高等学校指導要領家庭科)として、学校給食、病院給食、工場給食、共同炊事を学ぶしくみになっているにすぎない。ここでは中国の必要としている「家事の集団化」の歴史的社会的条件と実態の一部を紹介してみよう。以下は、「人民中国」(一九五八年一月月号)から要約したものである。

(編集部)

中国における家事の集団化は、六億五千万の人口の半ばをしめる婦人を家庭の雑用から解放して、工農業、文化、教育、衛生事業にとって必要な働き手にかえることであつた。

しかもその結果、中国の社会主義建設事業は急速に発展するようになった。

一九四九年に新中国が誕生することによつて、中国の婦人は始めて政治的にも教育的にも男性とおなじ権利をあたえられて、各民族の婦人は国の政治にすんで参加した。各級の人民代表大会の代表のなかに、一〇%から二〇%、あるいはそれ以上の婦人代表がいる。各級の学校には大ぜいの婦人が学んでいる。都市の婦人はひろく社会的な労働に参加しており、一九五六年には婦人の労働者・職員は全国で三百余万人になっている。農村の婦人も家事の合間を利用しては田畑に出て働くようになり、農業生産協同組合での労働の二五%は婦人がしめるようになった。

だが、一九五七年末までは、都市の婦人以外の仕事につく人の率は、全国の労働者・職員数の一四%程度で、それほど高くはなかつた。ところが第二次五ヶ年計画(一九五八—一九六二年)によつて、遊休労働力を解消し

たばかりでなく、潜在労働者は、おもに婦人のあいだにしかない、という状況をつくり出した。

ところで、広はんな婦人たちが生産に参加できるようにするには、家庭のわずらわしい雑用からの解放が先決問題である。そうしなければ炊事や子守り、縫いものなどにおわれている婦人を生産に参加させることはなかなかである。実際に調べてみたところでは、婦人が三度の食事の仕度をするためには、時間は、毎日三時間ないし四時間で、それに縫いものや洗たく、子守りなどもあるので、とても他の仕事に手を出せない。この問題を解決するただひとつの正しい方法といえ、家事を集団化する以外にはない。炊事や洗たく、子守りなどをひとまとめにして集団的にやれば人手がはぶける。そういうところから町でも公共食堂や託児所、裁縫班、洗たく班などが生まれたのも当然のことであつた。

公共食堂は、どこかの農村でもある。河南省では住民の七一%は公共食堂で食事をしているし、青海省でも農業地帯では農家はみな公共食堂で食事をとっている。人民公社には、生産隊ごとに公共食堂がある。都市のばあいには、もともからある工場や機関の食堂がい

町内ごとに公共食堂ができています。公共食堂のよい点は、なんといっても婦人を台所から解放したことであるが、さらに公共食堂を利用すると、食事の内容もよく、経済的でもある。

炊事が集団化されると、裁縫、洗たくその他の労働の組織化がわりあい簡単にやれる。集団化すれば炊事や洗たく、裁縫なども、しだいに機械でやれるようになるから、能率はあるが、労力や支出もいっそうはぶけるようになる。

農村の託児所数はぐんぐんふえている。どの人民公社にも託児所がいくつもある。山西省の二一の県では、農村の幼児の九割までが託児所に入っている。都市でもその数は急速にふえている。

子どもをあずける形式はいろいろである。「全託」といって、子どもを託児所にいれ、食と住のすべてをまかせ、週末と休日を親もとで過ごさせるものもあれば、「日託」といって朝から夕方まであずけるものもある。託児所では、係りの人が専門に子どもにかかりきりでよく世話をやいてくれる。子どもたちに遊戯を教えたり、簡単な手工をやらせて働く習慣をつけてくれたり、集団生活の習慣を

つけてくれる。子どもたちは家庭にいとまよりもずっとよい生活ができる。

一日ちゅう家庭にとじこもっていたのではどうしてもものの見方、考え方を発展させることはむずかしいし、家庭での婦人の地位はどうしても男性にくらべておとるのはいじめない。ところが、外に出て働くようになる男女間の差別はいやおうなしに消滅する。こうした点からいえば、家事の集団化は、おびただししい婦人をせまい家庭のわく外に出させるわけであり、中国婦人の再度の、しかも徹底的な解放を意味するものといわねばならぬ。

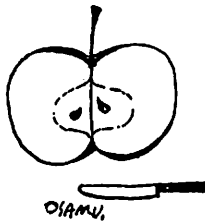
ところで、そうなれば、中国人には家庭というものがなくなるし、生活の楽しみやうるおいも失われるのではないか、と気にするむきもあるかもしれない。ところが事実はそのではない。家庭はなくならないし、生活の楽しみやうるおいは逆にふえることになる！

社会主義制度のもとでは働くものの幸せな家庭がいとなまれている。中国では失業におびやかされることはないし、生産がふえるにつれて、びとの収入も多くなつてゆく。生活になんの心配もなく、しかも家事の集団化によって家庭のわずらわしい雑用がすくなく

なれば、家庭生活の楽しみとるおいは増しこそすれ減ることはない。それだけではなく、社会生活の幅がひろがるにつれて娯楽の範囲もひろくなるから、生活の内容がゆたかになってきた。

中国の農民は、人民公社の実施する生活の集団化によって公共食堂や託児所、裁縫班、洗たく班などを提供されたばかりでなく、日あたりのよい住まい、浴場、クラブ、夜間球場なども提供されることになった。

家事の集団化によって、社会にばう大な労働力が提供され、ひいては急速に生産が発展したばかりでなく、婦人が再度にわたって解放されることになった意義には、はかりしれないものがある。



技術家庭科改訂案の修正箇所

さきに、本誌九月号に掲載した資料「技術・家庭科の改訂案」は、十月一日の官報告示によって、いくつかの辞句について修正された。つきにその修正箇所をかかげる。(ページ・行数は、本誌昨年九月号のもの) (編集部)

ページ	行	改訂案	修正箇所
9	上段3	よろこび	喜び
9	上段17	技術・家庭	技術・家庭科 以下同じ
9	中段1・6	目標一	「目標」をとる
9	中段16	設計製図	設計・製図 以下同じ
9	中段22	理解された	習得された 11ページ下段23行および17ページ上段15行も同じ
10	下段23	(実習例)	「(実習例)」各事項の説明前文 以下同じ
10	下段24	融合させて	合わせて 12ページ上段1行および17ページ上段17行も同じ
11	下段23	理科実験用具	学校備品
11	中段16	内容の授業	「内容の」をとる
11	中段17	二五時	二五単位時間 以下同じ
11	下段20	整備・操作するのに	整備や操作に
13	中段13	製作・修理するのに	製作や修理に

ページ	行	改訂案	修正箇所
15	中段2	栽培技術	栽培技術
15	上段6	近代技術	近代技術
15	上段14	第一学年に準じる	第一学年「(2)被服製作エウ、」に準ずる
18	中段9	黄銅板	黄銅板
18	中段14	間食の調理	間食
18	上段18	幼児生活と被服	幼児服
18	中段14	幼児服のくふう	幼児服の考察設計
18	中段15	取扱	取扱・点検
18	中段19	(実習例)単相誘導動機	削除
18	中段21	ワニス・合成樹脂	削除
18	中段21	間取りのくふう	間取りの設計
18	下段9	経営や管理について	経営について
18	下段22	「……指導する」以下	この場合単なる技能の習熟に片寄らないように留意する。
18	下段24	「必しも」以下を次のように改める	そのまとも方や指導の順序を示すものでないから「第一目標」および各学年の目標や指導上の留意事項をじゅうぶん考慮して、適切な組織順序をもった指導計画を作成して指導することが望ましい。
18	上段5	まで	指導計画の作成にあたっては生徒の学習のための集団の作り方や時間割などをくふうして、指導が円滑に行われるようにする。
21	中段9	黄銅板	黄銅板
21	中段14	間食の調理	間食
21	上段18	幼児生活と被服	幼児服
21	中段14	幼児服のくふう	幼児服の考察設計
21	中段15	取扱	取扱・点検
21	中段19	(実習例)単相誘導動機	削除
21	中段21	ワニス・合成樹脂	削除
21	中段21	間取りのくふう	間取りの設計
21	下段9	経営や管理について	経営について
21	下段22	「……指導する」以下	この場合単なる技能の習熟に片寄らないように留意する。
21	下段24	「必しも」以下を次のように改める	そのまとも方や指導の順序を示すものでないから「第一目標」および各学年の目標や指導上の留意事項をじゅうぶん考慮して、適切な組織順序をもった指導計画を作成して指導することが望ましい。
22	中段6	全文をつぎのように改める	指導計画の作成にあたっては生徒の学習のための集団の作り方や時間割などをくふうして、指導が円滑に行われるようにする。
22	より下		
22	段2まで		
22	下段3	3行の文章を削除し、次の文章をいれる。	学習の環境を整備し、実習のために服装を整えさせ、(以上)

機関誌発行の変更についてお知らせ

さる一月三十一日、新たに召集された委員会で、機関誌「教育と産業」の発行を出版社にまかせ、市販の雑誌とすることが提議され、承認されました。

その趣旨は、世界的に技術教育への関心がたかまり、つきつきと革新的プログラムが出てきている情勢にかんがみ、わが国でも新しい技術教育プランの検討と推進を必要としている。このさい、会員への頒布をたてまえとしてきた本誌も、この教育への関心をいなく全国の同志へひろく拡張することの意義をみとめたこと、またこのような要請に応ずるには、現在の形態では多くの限界があつて、誌面の拡充強化をはかりえないこと、以上の点から、この決定にふみきったわけです。

会員諸氏の御了承をうるとともに、今後の御協力と御支援をおねがいします。発行移行後の雑誌は

出版社	国土社	体裁	A5・六四ページ
誌名	技術教育	定価	六〇円
刊行	月刊(毎月一日発行)		

となります。新誌発行は五月号(四月中旬発売)からです。このためすでにお知らせしたように、「教育と産業」は二・三月を合併号とし、四月号は休刊とすることにします。

この移行にともなう既払込会費の新誌代へのふりかえ処置については、決定したい各位へおしらせします。「教育と産業」通巻第八十一号まで、困難な条件下で、専任の編集者も事務員もなく発行し続けることができたのは、全国の同志の支持とこの教育の真の発展へのねがいにかさえられていたからだと思ひます。

「教育と産業」がはたしてきた歴史的意義の延長の上で、新誌「技術教育」が充実発展するよう、今後とも全国にわたるつよい同志のつながりをもち続けていきたいと思ひます。

一九五九年二月十日

産業教育研究連盟常任委員会

編集後記

二・三月合併号をおとどけいたします。本号が合併という形をとったいきさつについては、すでに事務局から会員各位に御通知がとどいたことと存じますし、本号でもお報せいたしました。連盟本部が編集、刊行、発送していた機関誌「教育と産業」は、姿を消すこととなります。

現在の編集部が先輩からバトンをひきついたのは、一昨年の二月からでしたから、ともかくも二年間ほどやたらバタバタしてきたこととなります。その間の不手ぎわ、怠慢のわずかず、あらためて深くおわびいたします。きびしい民間教育団体の歩みの、その血肉となり手足となるべき機関紙の編集が、しばしばよるめき、とだえがちであったということの損失の重大さを、私は正面からうけとって頭をたれるほかありません。

今ごろ何をいつてるか、と叱られるにきまっているにしても、最後の編集をおえて感概なきをえません。しょげたり、くさったり、時には字頂点にもなったり、ともかく二年間の起伏が、「教育と産業」の誌名とともに終るのです。原稿が足りなくて血なまこになった時がありました。発行がおくれたり、内容・体裁の吟味が不確かで、ケチヨンケチヨンに叱られたこともありました。ショウ然たる編集部一同が、やがて渋谷かいわいのギョーザか何かで、反動的なメートルをあげ、天馬空をゆくがごとき名企画をどなりちらし、けれども明日はまたペンシャンコになるのもたびたびでした。何よりもしかし、今月は中味があるぞと思うときは、朱ベンに力が入りました。玉稿をおよせ下さった皆さんへ、心からの感謝をささげなければなりません。

考えてみれば、これら苦しみや喜びは、第巻以来の組織活動そのものの上にあつたのでした。われわれの強さ、あるいは弱さをもふくめて、それらがこの組織の上でだけ展開さ

れたのだということ、しつかり見つけておきたいと思えます。社外編集——店頭販売という形をとったにせよ。機関誌は、組織が生み出すものであり、組織に働きかけるものであることに、変りはないと思います。むしろ、こんにちまでの同族的な気安さに比すれば、こんごマス・コミの流れに互して、しかもきびしい組織体制を固めながら発言をつづけたい。会員の総力をあげて、愛する機関誌の脱皮をたくましい成長にもり立てていただくことをお願いして、最後の後記を閉じます。

(村田忠)

教育と産業・二・三月号 (通巻第八十一号)

昭和34年3月5日発行

定価四〇円(送料四円)

編集長 村田 忠 三

発行所 東京都目黒区上目黒七の二七二
産業教育研究連盟

(振替東京五〇〇八番)

本部 国学院大学教育学研究室内

▽書店販売せず直接注文のこと。

▽会費前納の会員に毎月送附する。

(会費年五〇〇円・半年二五〇円)

▽入会者は会費を添えて申込むこと。

會員名簿(追加)

和歌山県

日高郡上山路中学校
和歌山市 山東局内黒岩

寒川 進一
尾崎 進

越智郡菊間町 菊間中学校
佐賀県

益田 政雄
北村 卓一

東村山郡天童町 成生中学校
鶴岡市 大泉中学校
西田川郡温海町 大字温海

浅井 讓
白幡 達雄
粕谷 孝治

兵庫県

明石市字谷田六六 公団住宅四号高野 悦夫
加西郡加西町 富合中学校
明石市魚住町 魚住中学校

大分県
日田市藤山町 戸山中学校
熊本県

平松 定治
梶原 安之

相馬郡小高町 金房中学校
伊達郡桑折町成田
大沼郡会津高田町東尾岐中学校

岡田 行雄
鈴木 善弘
佐久間英夫

多可郡加美村 松井中学校
氷上郡氷上町 氷上中学校

山口 敬一
丸岡 哲郎
足立 種雄

天草郡有明町 浦和中学校
宮崎県
都城市五十町 五十市中学校

吉田 利則
財部 幸平

鹿島郡銚田町安房
西萩城郡笠間市下市手
結城郡石下町 岡田中学校
結城市 結城中学校

白井 米子
広田 貞子
篠崎 正雄
浅野 耕一

児島島 藤田中学校
久米郡久米町 秀実中学校
玉島市柏島 玉島西中学校
井原市木之子町

依田 康男
杉山 太郎
柚木 直樹
中尾 英鹽

鹿児島県
枕崎市 別府中学校
大口市 西太郎中学校
鹿児島市田上町唐湊住宅一八号

中迎 寛吉
井手籠初男
鈴 春夫

下館市八丁台 下館第一中学校産業教育教室
埼玉県
比企郡玉川村 玉川中学校
同右

岡本 保一
畑中 和

広島県

深安郡神辺町 安那中学校
三原市沼田東町
三原市館町 広大附属三原中学校加藤 良明

諏沢 辰己
第六中学校

北海道
芦部郡砂原村 砂村中学校
川上郡弟子屈町 弟子屈中学校
根室市

米内 勇雄
谷 昇
根室中学校

新宿区上落合二の六六七
小金井市小金井町一七五四
杉並区下井草町一七四

松江 浜子
横村 千枝
粉川秀次郎

深安郡加茂町下加茂
加茂郡志和町

渡辺 徳一
志和中学校

岩手県
岩見沢市 豊中学校
盛岡市惟子小路八七

望月 栄松
菅原金次郎

神奈川県
植須賀市浦賀町 浦賀中学校長 今井金之助
(以下次号)

山口県
熊毛郡田布施町麻郷

寺下 勇

山形県

科学技術時代に備えて国土社が贈る

「産業と教育」改題第一号!

技術教育

五月号

一般教育としての技術教育……………細谷俊夫
 技術教育と技術の進歩……………内田俊一
 新学習指導要領の要点……………日向 熙

急所の指導学習

製図の基本……………山岡利厚
 草花の栽培……………中村邦男
 自転車……………谷 正好
 電気アイロン……………稲田 茂

技術科の年間指導計画の実際……………草山貞胤
 教養講座Ⅰ 技術革新と技術教育……………清原道寿
 技術の基礎Ⅰ 家庭電気器具……………馬場秀三郎
 サークル活動七年間の歩み……………大河内重男
 ▲学校訪問記▽春日部中学校……………編 集 部

★産業教育研究連盟編集
 A 5判六四頁 六〇円 送四円

産業教育研究連盟編

職業科指導事典

B 5判五二五頁
 価二〇〇〇円
 送料六〇〇円

職業科指導に 職業科を日本経済・国民生活との関連
 関する知識の においてとらえ、学習内容・指導計画
 一大集成! 指導方法および施設・設備について体
 系的に叙述した職業科指導書の決定版

細谷俊夫編 新教育課程双書
 中学校篇(9)

価一五〇円
 送料一六円

技術・家庭科の新教育課程

新学習指導要領の決定に正しく対処するための文部省
 担当官・専門学者・実践家により執筆された中学校技
 術家庭科教師必読の手引き書である。

清原道寿監修

入門技術シリーズ 全六巻

- 1 木工技術の初歩 山岡利厚
- 2 機械技術の初歩(金属加工編) 村田建治
- 3 機械技術の初歩(原動機編) 真保吾一
- 4 電気技術の初歩 馬場秀三郎
- 5 ラジオ技術の初歩 稲田 茂
- 6 テレビ技術の初歩 山林正明

★五月上旬より刊行の予定 予価各二〇〇円

東京都文京区
 高田豊川町37番地

国 土 社

振替・東京 90631
 電話 大塚(94)1950